

家村ゼミ展 2024 「空間に、自然光だけで、大竹利絵子の彫刻を置く」

会場：多摩美術大学 八王子キャンパス アートテークギャラリー（〒192-0394 東京都八王子市鎌水 2-1723）
主催：多摩美術大学芸術学科 展覧会設計ゼミ
協力：小山登美夫ギャラリー / 撮影：小俣英彦
ゼミ生：橋原世瑛、川田宗志郎、亀岡明里、熊野ちひろ、黄 游儀、齋藤陽子、高橋芳弥、羽下菜々子、瀧田里紗、松倉真優、本島美瑠、楊 環
アルムナイ：川崎守一 / 研究生：藤 天海
担当教授：家村珠代 / 非常勤講師：奥田菜々美 / 副手：高橋莉子



多摩美術大学
八王子キャンパス
アートテークギャラリー

10月4日（金）～22日（火）
10時～17時
日曜休館
入場無料

家村ゼミ展 2024
空間に、
自然光だけで、
大竹利絵子の彫刻を置く



【展覧会名】 家村ゼミ展 2024 「空間に、自然光だけで、大竹利絵子の彫刻を置く」

【会期】 2024年10月4日（金）～ 2023年10月22日（火）
10月6日（日）、10月13日（日）、10月20日（日）は休館日になります。

【開場時間】 10:00 ～ 17:00

【会場】 多摩美術大学 八王子キャンパス
アートテークギャラリー 101,102,103,104,105
〒192-0394 東京都八王子市鎌水 2-1723

【観覧料】 無料

【アクセス】 橋本駅より：北口 6 番乗り場より神奈川中央交通バス「多摩美術大学行」約8分
八王子駅より：南口 5 番乗り場より京王バス「急行多摩美術大学行」約 20 分

【イベント】 トークセッション：

①

日時：2024年10月5日（土） 13:00～15:00

場所：多摩美術大学アートテークギャラリー

登壇者：保坂健二郎（滋賀県立美術館ディレクター）、大竹利絵子（彫刻家）

②

日時：2024年10月14日（月・祝） 13:00～15:00

場所：多摩美術大学アートテークギャラリー

登壇者：青木 淳（建築家）、中尾拓哉（美術評論家）、中村竜治（建築家）、大竹利絵子（彫刻家）

1. 「家村ゼミ展」とは

多摩美術大学美術学部芸術学科・家村ゼミは、制作を通して、作家・学生・教員、またその周辺との間で生起する試行錯誤全体を「家村ゼミ展」と呼んで来ました。「展」という言葉は入っているものの、それはできあがった展覧会そのものを指すのではなく、そこに向かって進む過程全体・運動体のことを指しています。つまり、「家村ゼミ展」とは、展覧会のあらかじめ完成形を決め、その実現を目指す従来型の「展覧会」ではなく、一種のアート・プロジェクトなのです。

2017年度以来、アート・プロジェクト「家村ゼミ展」は毎年1本ずつ、作家、そして学部3年と4年の学生たちと行われてきました。これまでに行われたのは、「高柳恵里×高山陽介×千葉正也」展、泉太郎の個展、「日高理恵子 村瀬恭子 吉澤美香—ドローイングから。」展、「金氏徹平のグッドベントレーション —360°を超えて—」展、「今年は、村田朋泰。—ほし 星 ホシ—」、「中村竜治 展示室を展示」、「空間に、自然光だけで、日高理恵子の絵画を置く」の7本です。

2015年に八王子キャンパス内に設けられたアートテークギャラリー1階(約520平米、一部天井高9m)を会場としています。

2. 「空間に、自然光だけで、大竹利絵子の彫刻を置く」について

昨年の展覧会「中村竜治 展示室を展示」は、アートテークギャラリー1階の4つの展示室(約520平米、一部天井高9m)に、市販の白い紐だけを使用し、会期中3回の紐の設え変更を公開で行い「展示室を展示」いたしました。「帯」「結界」「対角線」と中村竜治が名付けたそれぞれの設えは、鑑賞者に自主的な「観察」をうながし、鑑賞者個々の目と身体で展示室を捉えなおすきっかけとなるような機会となりました。

また昨年は、「空間に、自然光だけで、日高理恵子の絵画を置く」にて、4つのどの展示空間にも照明を使用せず、自然光だけの彩光とし、日高理恵子の作品を5点だけ展示いたしました。物理的に言えば、日高の絵画は、空間に対してとても小さな存在です。しかしその結果、それら絵画は、大きな余白と距離を所有することになりました。この展覧会は、単に自然光でみる日高理恵子の個展という位置付けを超え、光と翳、空間、絵画、天気、時間、音、居合わせた人々の振る舞い、そういったものから個々の目と身体が体験・体感する場となりました。

アートテークギャラリーは、あらかじめ展示空間として設計された空間ではありますが、ガラス面が多く、外光が空間に影響をあたえるという特徴があります。この展示空間の特徴は、一昨年、昨年の2つの展示により、強く認識することとなりました。そこで、今年は、この展示室の特徴を生かし、昨年同様4つの展示空間は照明を使用せず、自然光だけにし、大竹利絵子の木彫作品、8点(うち新作4点)のみを展示いたします。

本展の特徴

1. 自然光だけの空間

アートテークギャラリー 1階の4つの展示室は、約520平米の空間です。その空間を、人工照明を使用せず、自然光だけの状態にします。

2. 木彫作品が8点のみ

約520平米、一部天井高9mの、自然光だけの4つ空間には、大竹利絵子の木彫を8点のみ置きます。そのうち、新作は4点、涙を抱える2メートルを超える立像、約120センチの胸像と30センチの坐像、初めて挑む柘植の棒状の作品が置かれる予定です。それらに、大学院時に制作した少女像等々、年代、大きさ、木の素材もばらばらな作品が加わることで、彫刻がどのように空間に反応するのかが試みられます。

3. 環境の異なる4つの空間

4つの展示室はそれぞれで、自然光の入り方が異なります。中には自然光が直接入らない展示室もあります。くわえて、天候、時間、そして鑑賞者の気分などの影響をうけ、環境の異なる4つの空間、そして8点の木彫は、それぞれが常に揺れ動くものとなることでしょう。

4. 大竹利絵子と作品

1978年神奈川県生まれ。2002年東京藝術大学美術学部彫刻科卒業。2004年同大学院美術研究科彫刻専攻修了後、2007年同博士課程を修了。現在、東京藝術大学美術学部彫刻科准教授。

主な個展に「Hanako」（森岡書店、東京、2023年）、「あなたはどこから来たの？」（小山登美夫ギャラリー、東京、2021年）、「Way in, or Out」（8/ART GALLERY/ Tomio Koyama Gallery、東京、2015年）、「たぶん、ミミ」（小山登美夫ギャラリー、東京、2012年）など。主なグループ展として、「ヒューマンビーイング - 藤野天光、北村西望から三輪途道のさわれる彫刻まで」（群馬県立館林美術館、2024年）「平衡世界 日本のアート、戦後から今日まで」（大倉集古館、東京、2023年）、「彫刻と家」（旧平櫛田中邸アトリ工、東京、2021年）、「真鶴町・石の彫刻祭」（神奈川県、2021年）、「刻まれた時間 - もの語る存在」（東京藝術大学大学美術館陳列館、東京、2018年）がある。

2005年第9回岡本太郎記念現代芸術大賞展入選。作品は札幌宮の森美術館、Japigozziコレクション、高橋龍太郎コレクションなどに収蔵されており、2023年初の本格的作品集『Hanako』（torch press）刊行。

（上記は<http://tomiokoyamagallery.com/artists/rieko-otake/>から引用）

本展には、初期の重要な作品「ユメムシ」そして「とりとり」から4点が出品される。峯村敏明氏は2010年、「ユメムシ」と「とりとり」について次のように記述しており、それらは大竹彫刻の出発点とも言える作品である。

「とりとり」は「鳥取り」なのではあるまい。鳥を抱く人、鳥に取りつく人、鳥と共に天翔る人とは、どちらも「抛る存在者」と「抛られる存在者」の弁別的共在を示しているのもであって、その関係項としての鳥と人はともに「とり」なのである。であるから、大竹は片足だけでつま先立ちした少女の像に、鳥がいるわけでもないのに《とりとり》の題を与えた。そこでは「抛るもの」は少女像であり、「抛られるもの」は台座である。彫刻というものがそもそも鳥と止まり木の間の出来事なのであって、すなわち「とりとり」なのだ。鳥と少女の物語をしているように見えて、いや、そう見る人がいても差し支えないが、大竹はしたたかに「彫刻」を営んでいたのである。(中略)そもそもの発端は蝶であった。「私」と「蝶となって遊ぶ私」という二つの現実(そして仮象)に彫刻としてどのように折り合いをつけることができるかが課題であった。人と蝶のキメラ的合体では単純な虚構しか生まれなかった。さりとて、「ユメムシ」の時期の蝶は、少女像の身振りと表情の内に抱き込まれて、夢想する少女としてしか表象され得なかった。「私」と「もう一人の私」は、むしろ分別表現されることよってのみいっそう高次の多元的存在の同一性をあらわにし得るのではないか。作家はそう会得したのであろう。それが、「とりとり」の開眼であった。

峯村敏明、「止まり木が鳥でもあるような—大竹利絵子の木彫に寄せて—」『大竹利絵子「夢みたいな」カタログ』, 小山登美夫ギャラリー, 2010

5. 目と身体が体験する場

本展では、大竹利絵子の木彫を通じてどのような空間がひきだされるのか、あるいは彫刻がどのように空間に反応するのが試みられます。昨年度に引き続き、今年もまた、光と翳、空間、彫刻、天気、時間、音、居合わせた人々の振る舞い、そういったものから個々の目と身体が体験・体感する場となることでしょう。

6. トークイベント

今年は、一昨年開催した「中村竜治 展示室を展示」、そして昨年開催された「空間に、自然光だけで、日高理恵子の絵画を置く」の延長線上、さらにその先を探るような展覧会という位置付けから、ひとつは、一昨年昨年と同じ登壇者の青木淳(建築家)、中尾拓哉(美術評論家)、中村竜治(建築家)、大竹利絵子(彫刻家)による「空間から彫刻への視点」をテーマにしたトークを行います。もうひとつのトークでは保坂健二郎(滋賀県立美術館ディレクター)、大竹利絵子(彫刻家)による「大竹利絵子の彫刻から空間への視点」で語り合ってください。

ゼミでの様子



【主催】 多摩美術大学美術学部芸術学科 展覧会設計ゼミ（家村ゼミ）

担当教授：家村珠代

非常勤講師：乗田菜々美

副手：高橋莉子

アルムナイ：川嶋守一

研究生：顧天淼

ゼミ生：植原世璃、川田宗志郎、鬼頭明里、熊野ちひろ、黄 滌儀、齋藤陽子、高橋芳弥、
羽下菜々子、濱田里紗、松倉真優、本島美瑠、楊 壤

【協力】 小山登美夫ギャラリー

【撮影】 小俣英彦

【お問い合わせ】

公式 HP：<https://www.iemuraseminar.com/>

TEL：042-679-5627（多摩美術大学美術学部芸術学科研究室）

Email：tenrankai.sekkei@gmail.com（展覧会設計ゼミアドレス）

【SNS】

Twitter：@iemuraseminar

Instagram：@iemuraseminar